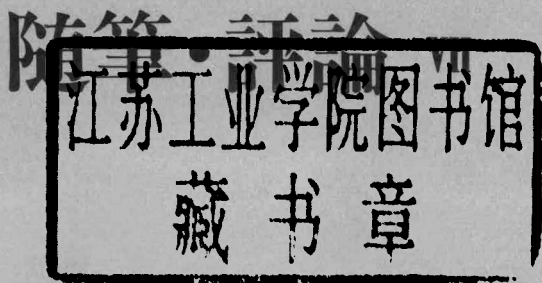


内田魯庵全集

補卷 3



ゆまに書房

内田魯庵全集 補卷3

昭和六十二年九月二十五日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 文勇堂製本工業(株)

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町
電話 (二九二〇七九八
振替 東京四―六三二六〇

内田魯庵全集補卷3／隨筆・評論Ⅶ・目次

一九一五年を迎へて生活問題を想ふ	七
馬場氏の自重を望む	二一
一月の創作壇	二四
選舉雜感	二七
秘魯古陶『鳴壺』	三二
讀書の意義と著述界の新傾向	四三
或問（讀書説に就て）	五一
翻譯文に就て	五八
春の光の蔭にて	六一
書籍異聞抄	六三
初めから珍本である雜誌	八〇
金を以て一切の標準とする社會	八六
女の雜誌の現在と將來	九一

客と語る	九
ポスター雑説	一四四
「家政婦」としての新職業へ	一六二
最近三四十年の女の風俗	一七六
日本の女	一八九
Chit Chat	一九九
婦人に読ませたい洋書	二一〇
消化不良的家庭生活	二一五
明治以降——『見せ物』の變遷	二三〇
女の心から「結婚」の目標を取れ	二三九
俳句の話から樂園へ	二五〇
『馬琴日記』跋	二五三
湖畔より	二五七
家常茶飯	二七三

異國日本	三三一
『法然傳』を読む	三六八
江戸ッ子大臣と其屬僚	三七三
病臥六旬	三七八
讀書放浪	四一二
讀書巡禮	四五九
イバーネズの日本漫遊記其他	五〇五
誰が好き? 誰が嫌ひ	五一二
『明治初年の世相』序	五一六
書齋の Past & Present	五一九
日本の文學に及ぼしたる歐洲文學の影響	五五九
モダーンを語る	五八一
解題	五九五
解説	五九九

隨筆・評論
VII

一九一五年を迎へて生活問題を想ふ

(一)

大晦日に下町の目貫の通りを徜徉^{たうちやう}いた。素通りしたゞけでは解らぬが、どの店も景氣は素晴らしいがお客は殆んど無い。酸漿提灯^{はうづま}や樂隊が賑やかに囃し立てるに引較べて店員の手持無沙汰に見えるは「泣笑ひ」といふやうな一種の騒がしい悲哀を感じさせた。

去年の暮は或る著名な大會社を初め到處で改革を斷行した。我々の關係範圍内でも某の新聞社某の雜誌等で一度に十數人を淘汰したさうだ。足を摺小木にして職業を求むるものが一日増しに殖える中に、此の歳暮は更に失業者を一層増加したであらう。

不景氣の聲は年々繰返されて、最早其のドン詰りであると云はれた事も度々であるが、之から先きドコまで沈淪するか知らぬが左も右も去年の暮は二三年前に比べて更に一層沈衰したのは争はれぬ。事實は特に説明せずとも如何なる人の周圍にも必ず明かに認め得られるだらう。

自分は經濟論をするのでは無い。此不景氣が何に由て生じ、如何にして救濟されるかを攻究するのでは無い。唯此何等かの形式の下に何人をも悩ます生活の苦痛なる事實が思想上及び藝術上に如何なる影響を與ふるかを研究して見たい。必ず何等かの影響があるべき筈だと思ふ。

一體之までの日本の讀書子——其大部分が士族階級に屬する讀書子は封建の高揚枝的武士道德が抜け切れないで生活を談ずるを卑んでゐた。福澤先生の經濟思想が妙に穿き違ひされた拜金説が一時流行し、その後成功論が頻りに主張されたが、是等の拜金説も成功説も富を目的とする立志の教訓であつて實際の經濟的苦痛には少しも觸れてゐない。日本の著述家も讀書子も「お腹が空いても饑じうない」といふ武士の道德を守りて實際の生活問題に觸れるを恥辱とする風があつた。夫故に、例へば最近數年來「生活難」といふ問題が屢繰返されても、大抵自分自身の問題としないで「俺は少しも困つてゐないが……」といふやうな態度で、恰も對岸の問題であるかのやうに説き且較やともすれば之を「生活難」愁訴者自身の道德的缺陷に歸し、少なくとも生活難を口にするは士君子の屑よしとせざる處として、自分も沈黙すれば人の口をも鉗するやうな傾きがあつた。

(11)

歐羅巴や亞米利加でいふ失業者問題は賃銀問題といふも矢張勞働者の問題であつて、社會主義的色彩ある議論は常に勞働者の生活を背景としてをる。中等階級の生活の苦痛といふやうなものを論じたものは甚

だ少くない。併し乍ら日本では大に事情を異にして居る。日本の中等社會即ち士族階級は之迄家祿と特殊の待遇とが與へられてをつた故生活には少しも心配なく、且其祿は餘り厚くなくても町人には決して許されない特權が與へられてゐた故縱令衣食に薄くとも金持の町人を社會的に見下す事が出來たのだ。此制度が三百年の封建を維持して健全な文明の發達を助くる事が出來たのだが、一朝維新の變革に由つて此制度が壞れた爲めに啻に生活の安全がグラつき出したのみならず、特殊の待遇が撤回されて無形のプライドを失ふやうになつた。勿論三百年間（といふより鎌倉以降六百年間）培養した封建思想は一朝の人爲的改革の爲め根こそぎ顛覆される筈は無いから、維新の初めにあつては家祿を失ひ乍らも士族といふ誇りは猶ほ存し、之が爲めに官尊民卑の弊風を生じたが、其代りには又富が唯一の社會的尊卑の標準とならない處に中等社會即ち士族階級の誇りもあつたし満足もあつた。生活には多少不自由はあつても此誇りや満足に由て補はれた氣味もあつた。然るに今日は維新以來五十年を経過して士族を重んずる封建思想が全く薄らぎ、殊に經濟上の變革からして富の勢力を著しく増進するに比例して、富を輕んじて富に交渉せざるを高しとした士族即ち中等階級のミジメさは次第に増て來た。歐羅巴や亞米利加には恁ういふ事實が無い。隨つて恁ういふ問題を論じたものが殆んど見當らない。が、日本では元來武士階級が文明の中堅を維持し、國粹論者の誇りとする特殊の道德も武士階級が創造し養育し且把持して來たのだから、主として武士の子孫から成立つ現在の中等階級の生活の危殆は歐米に於ける勞働者問題よりは日本の文明の根基に最も痛切な關係ある重大問題として見なければならぬ。

(二)

日本の町人階級及び労働者階級は三百年來先祖代々の町人階級及び労働者階級である。夫故に三百年來の封建制度に支配されて來た習慣が俗をなして枉屈にも忍び卑賤にも馴れてゐる。日本の或る貴族が亞米利加の或る工場を見物に行つた時、汚ない労働服を着た職工が汚ない手を出してイキナリ握手して「グッド、モーニング」と云つたので驚かされたといふ咄しがあるが日本では今日でも片田舎へ行くと洋服を着た權勢者には靴で蹴られても決して怒らない百姓がある。實に精神上のみならず物質上でも殆んど一家が豚小屋より汚ない掘立て小屋に住まつて麥の雜炊に漸く生命をつないでゐても格別不平を云はずにをる渠等は貧賤を自分の家の運命として斷念めてをる。随つて豚と同じやうな生活をして侮蔑されてゐても夫程の苦痛を感じないでゐる。公平に見て、氣の毒な同情すべき、救ひ上げてやらねばならない生活であるが、渠等自身は少しも苦痛も無く煩悶もなく安心してをる。都會の労働者は今日では大分變つてゐるが、猶且資本家には忠實であつて、社會的に卑賤視せられても左程に苦痛としない。渠等は傭者を檀那と稱して自ら奴婢の位置に満足してをる。

尤も貧民に屬するものなら、倫敦のイーストの咄しを聞いても精神上退化してゐるは東西共に同一であるが、労働者は貧民階級では無い。渠等は労働して衣食する獨立の生活者であるに係はらず、日本の渠等は其職業的位置と權利とを自覺しないで、今日でも猶ほ紳士閥又は資本家階級の奴婢に等しい境涯に甘ん

じて職工労働者の本分と心得てをる。

勿論、渠等の取る賃銀は縱令豊で無いにしても一般の報酬比例に準じて決して低くは無い。寧ろ中等社會を標榜する官吏或は銀行會社員等所謂『勤め人』の下級者と比較して却て超過してをる。渠等の社會的位置は封建時代の習慣が今だに存して猶ほ賤視されてゐるが、其の賤視されてゐるに比べては勞銀が豊かである故渠等が満足して苦痛を訴へないのは當然である。夫から比べると、同じ封建時代の習慣が抜け切れない爲めに勞働者階級又は町人階級に對して社會的優越者の格式を維持せねばならないやうな習慣に累せらるゝ士族階級の精神的苦痛は頗るミジメである。

(四)

此消息は日本の社會主義の運動の最近歴史を見るも了解せられる。日本の社會主義のパイオニーヤとなつた人たちは多くは士族階級及び士族に親近する知識階級であつた。且其運動は其初め片山潜氏が鐵工組合を率ゐて起つた外は皆著述文章に由つて主張したゞけで實際の運動をしたものは無かつた。其初めは皆ジャーナリスチックであつた。而して之に影響されたものは勞働階級で無くて讀書に親しむ知識階級であつた。日本の社會主義者が次第にアナキストの色彩を帯びて來て終に煽動的運動を初めるやうになつたのは、政府の極端な壓迫が刺激となつて渠等を爆發せしめたので若し政府が初めから無頓着無關心であつたなら渠日はいつまでもジャーナリスチックに留まつたであらう。

何處の國でも社會主義と勞働者とは離れない關係であるが、日本では殆んど交渉しない。幸徳事件があのくらゐ天下を騒がしても、勞働者は社會主義に就ては少しも理解してゐない。渠等は渠等の最も大なる味方である社會主義を仁丹、清心丹程にも難有がらないで、依然として資本家の足下に雌伏して満足してゐる。

歐羅巴や亞米利加で最も資本家を恐れさせるストライキは一時日本にも流行し掛つて來たが、二十年前の大宮の鐵道工場の罷工と數年前の電車の車掌運轉手の罷工との外は殆んどストライキらしいストライキを聞いた事がない。シカモ此二つの大罷工たるや、勞働者とは云ひ條、士族階級の出身者が多數を占むる半官吏的使用人の運動であつて、前者の如きは明かに賃銀の増額よりは待遇上の要求を主張した。後者の如きも亦待遇上の不満足が重なる原因であつた。恁ういふ賃銀を第二の問題とする待遇上の不満足に原因するストライキは歐羅巴や亞米利加にはあまり多く聞かない例である。近頃は餘り噂を聞かないが、日本の勞働者の不満足が最も鐵工仲間によく、次に印刷職工間に盛んなるは片山氏一派の鼓吹が與つて居るが、ツマリ片山氏等の主張に共鳴するは是等の職工に士族の落伍者が多いからである。純粹なる日本の勞働者は習慣と無知との結果能く資本家に従順であつて、大抵其境涯を満足してゐる。日本ではストライキは生活の壓迫を受くる勞働者よりは生活の交渉の無い學校の名物である。

以上の事實から推しても日本で生活の壓迫を感じるは勞働者階級よりは寧ろ知識階級に屬する中等社會の下級者である。勞働者の生活も亦決して氣樂では無いが渠等は先祖代々其境涯に馴れて満足してゐる。

加之ならず、其収入も亦他の階級と比べて決して低額では無い。渠等から比べると、中等社會の収入は割合に乏しく逼迫してゐる上に、中等社會たる資格を維持する爲めの精神上の苦痛を伴ふ故其境涯は更に一層悲惨である。

(五)

ドコの官廳でも高等官よりも判任官の方が數倍してをる。其判任官の中で五十圓以上のものは極めて少數で、大部分は五十圓以下である。判任官吏の平均俸給はイクラか知らぬが多分三十圓前後であらう。會社銀行其他ドコでも此三十圓前後の収入者が大多數を占めてをる。然るに勞働者は物價の騰貴に比例し各其賃銀を増加した。例へば車夫の如き、一方には電車に壓倒されて著しく其數を減じたが、同時に其賃銀を増加して一日一圓乃至二圓を稼ぐものは決して珍らしく無い。之を定備ひとすれば少くも三十圓以上の給金と其以外に仕着其他の手當をしなければならぬ。中には四五十圓の給金を取つてゐるものもある。銀行會社又は新聞社等には社員乗用の車夫を抱へて置く處があるが、時としては乗つてゐる旦那の社員の月給の方が乗せてゐるお供の車夫の月給よりも少い場合がある。シカモ安月給の社員の洋服は自辨であるが、高給の車夫の法被は備ひ主の仕着である。シカモ中等社會と標榜するものは洋服一つではゐられないに反して、車夫の法被は公定のユニホームである故、此ユニホーム一つで冠婚葬祭何處へでも出られる。

此一例だけでも如何に中等階級が困迫して勞働者が却て氣樂であるか解る。唯日本は猶ほ幸ひにして

(或は不幸ひであるかも知れぬが) 封建の遺風がまだ残つてゐて、羽織袴又は洋服の者は貧乏してゐても勞働者階級からは旦那と尊稱され、勞働者は如何に多額の收入あるものも謙下つてゐる。中等社會の低級者が往々侮蔑せられつゝも猶ほドウカコウカ面目を維持してをられるは是が爲めである。併し乍ら富の勢力が日に益々増して、漸く社會的位置の唯一標準たんとする時は中等社會を標榜する低級收入者はドウなるであらう。小學教員が人の子弟を教ゆる教師、警察官が人民を保護し安寧を維持する法の施行者として共に社會の厚き感謝を受くる身分であるに係はず屢人の侮蔑の的となつて巡査となり小學教師となるを餘り欲しないやうになつたは、封建の遺風が最早廢れて收入を伴はない職業上、門地上及び知識上の名譽は空虚になつたことを證明してゐる。

(六)

加ふるに物價は騰貴し、其上に生活の程度が高くなつた。文明の便利が殖えれば殖えるほど生活費は愈増加する。裏店までが電燈を點じ瓦斯を使用し水道の水を汲むは便利であるが、豆ランプを點じ廢物を燃料として無料の井戸の水を汲むと比べて費用を多くしたは争ふ事は出来ない。況してや中等階級に到つては今迄車に乗らずとも濟んだものが電車賃を取られ、どんな下級の者でも月給取りと云はれるものはフロックコートの外に袴羽織の一と揃ひを用意しなければならなくなつた。道學先生は頻りに虚榮を呪ふが、虚榮が文明生活の食物である以上は虚榮無しでは生きてゐられなくなる。議論する分には極めて簡單であ